



☆子供さんのことなら、どなたでも、気軽に  
相談してください

電話 30-1669 (時間 13:00~17:00)

メール kodomo-sien@yatsushiro.jp



前回の便りでは、近ごろの園児は、ままごと遊びで、なんと『ペット』になりたがるんだという話をしました。今回はその理由を考えてみたいと思います。

川崎市でフリースペース『たまりば』の運営に関わってこられた、西野博之さんは、著書『居場所のちから』の中で、理由の一つとして、子育てをする側の姿勢を問います。子育ての考え方や価値観も多様化がすすむ昨今、皆さんはどう感じられるでしょうか。

## それって常識？ 非常識？ ～気になる世間の目と他人の評価～

西野さんが「子育てを考える集い」で出会った、あるお母さんの話です。

「うちの子は、ちょっとくらい寒い日なら、パンツ一枚で裸足になって、砂場で遊んでいてもいいんです。でもよそのお母さんに見られたら、何と思われるか心配なんです。非常識な親だと思われませんか……。そう思うと、嫌がるうちの子にも靴をはかせ、服を着せてしまうんです。」

さて皆さんはこのお母さんの話をどう感じられたでしょうか？

西野さんは、大人が自分自身の感覚や判断に自信を持ってなくなっていると言います。

自分がしたいことや自分の想いを大事にするように育てられてこなかった人が親となり、『世間の目』『他人の評価』を気にしながら子育てをする。目の前の子がどうしたいのか、どうありたいのかより、その子の行動が世間の『常識』のはんちゅうに入るかが問題になる。そこからはみ出しそうなことは、『親の役割』として、管理や制限を加えなければならぬと考えてしまう。

このような姿勢を子供は敏感に感じ、何か違うと思っているとされるのです。

会が終わって、別室でお母さんたちと食事をしていた時のハプニングも書かれています。ダンスサークルのおばさまが血相を変えて飛び込んできたのだそうです。

「あなたたちここで何をしているの！自分の子が何やっているかわかっているの？私たちの部屋のドアを何度も開け閉めして迷惑なの。うるさくてしょうがないのよ。自分の子供ぐらい親の責任でちゃんと管理できなくてどうするの。非常識だわ。」

すごい剣幕でこう言うと部屋を出て行かれたそうです。

つい先ほどまで講座で話し合っていたことが、芝居を見ているかのように目の前で現実になり、参加者は顔を見合わせて笑ってしまったとあります。「根が深い・・・」というのが西野さんの感想です。

「子供との関係を見えにくくし、自分自身の生き方も息苦しくさせている社会通念や常識というものの中身を、大人は一度疑ってみるのもいいのでは」

と西野さんは言います。みなさんはどう思われたでしょうか？

今回は、子供が求めているものについて考えます。果たして、子供たちはペットのように自由気ままに生きて、ご飯が食べられて、愛されたいのでしょうか？

坂本町で尊い人命が奪われ、甚大な被害が発生した豪雨災害から1ヶ月半です。ボランティアに行き、災害が一瞬にして「日常」を奪い、私たちを不安に陥れることを目の当たりにしました。子どもたちが抱える不安の大きさも想像に難くありません。

『子ども支援相談室』でも、坂本中・八竜小の皆さんが安心できる「日常」を取り戻していける道のりを支えます。心配事があれば遠慮なく相談ください。**かんぼろう！坂本**